OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	女性の霊性に関する考察--女神たちのイメージから
Author(s)	藤澤, 佳澄
Citation	大阪大学教育学年報. 2004, 9, p. 107-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8680
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第9号（2004年）
Annals of Educational Studies Vol.9

女性の霊性に関する考察——女神たちのイメージから

藤 澤 佳 澄

【要旨】

深層心理学の分野では、昨今、女性の「霊性」について語られる機会が増えている。女性の「霊性」を表すモチーフとして例えば「女神」が考えられるが、中でもとりわけ「大女神」、「地母神」などと呼ばれる女神たちへの言及が目立つ。これらの女神たちは、人類が文明化される中で見失ってきた根源的な霊性を備える存在として、現在その価値を見直されている。

本論文ではこのような「地母神」の臨床心理学的意義を再確認する一方で、「地母神」ではない女神たちの臨床心理学意義について検討してみた。その女神とは「処女神」である。「地母神」と「処女神」を対比させながら考察した結果、新たな洞察が得られた。「地母神」が「死と再生」プロセスを司る存在であるとしたら、「処女神」が司るのは「状態の魔力」とも呼ぶべき、「異界に繋ぐ」働きである。「地母神」に関する研究は多くなされているが、「処女神」に関する研究はまだ手付かずのまま残されているように思われる。本論文をその第一歩にしたいと思う。

1 はじめに

深層心理学の分野でも昨今、女性の「霊性」について語られる機会が増えている。「霊性」とは何か、という問いに対して一言で答えるのは難しいが、本論文では、女性が持つ神秘的な力、神話的な力のようなものと定義づけ、論を進めたいと思う。さて、このような女性の「霊性」を表現するモチーフとして「女神」が考えられるが、中でもとりわけ「大女神」「地母神」などと呼ばれる女神たちへの言及が深層心理学の分野では多い。これらの女神たちは、人類が文明化、社会化される中で見失われてきた根源的な霊性を備える存在として、現在その価値を見直されている。文明化された社会とはすなわち父権的な社会であり、その中で成功をおさめた女性たちが、しばしば女性性の傷つきのためにセラピーを訪れていることもこの文脈の中で論じられている。男性優位の社会の中で忘れられてきた古の女神を復興させることで、傷ついた女性性を癒していこう、そういった文脈で語られる女性性に関する論文は非常に多い。

だが、それは的確に女性の「霊性」を語ってくれているのだろうか。現在言われている女性の霊性論が間違っているなどと論じるつもりはない。ただ、現在その価値が認められている女性の「霊性」は真実の全体像の中のほんの一部なのではないかと思うのである。詳しくは後述するが、女性の霊性が女神というモチーフを通して語られる時、それは女性の地下的な側面であったり、呑み込む力、産む力などという、いわゆる「マグナ・マーテル」という概念で説明されるものであったりすることが多いように思われる。原始宗教では女性の産む力を畏敬して成り立った母神信仰があったとされているが、女神、というときこの原初の女神を想定し、地母神的な女神のイメージで論じている臨床心理学のテクストが少なくないように思われる。女神は地母神ばかりではない。女性の霊性を語るとき、産む力に基づく母的な側面にこだわりすぎていないのだろうか。

筆者はこれを疑問に感じた。確かに現実レベルでも女性と男性を区別するとき、「産む」という力は女性をアイデンティファイする大きな特性になるだろう。だが、それだけが女性のアイデンティティではない。女性の霊性を語るとき、この点のみから論じるだけでは不十分に思われる。そこで「産む」ことに拠る霊性とはまた違う女性の霊性について論じることができればと考えた。それが本稿の目的である。産むことに拠る霊性も、今回筆者が考察したい霊性も、ひとしく女性の霊性という全体像を構成する要素であると考えている。「産む」ことに拠る霊性とはまた異なった女性の霊性について考察する本稿では、わかりやすく論じるために、これらを分けて説明する手法をとる。ただし、本質的には一部重なり合っている部分も、あるということを最初に断った上で、本題に入りたいと思う。

2 女神の系譜——地母神論

地母神の系譜を網羅することは決して容易ではない。地母神、もしくは大母神と呼ばれた女神の痕跡は世界中の広い地域で見つけられる。考古学的な出土品や、文献に残された神話・伝承の類がある。例えば「旧石器時代のヴィーナス」と呼ばれる女性像の類などは、多くの人が一度は目にしたことがあるのではないか。「顔がなく、全裸で、巨大な乳房と腹部をもち、性器も強調されている。」(松村　1999) 日本の文化で言えば縄文期の土偶がこの類になるだろう。このような女性像は日本のみならず、世界の他地域でも多く出土している。このように、考古学的な出土品などに残された地母神の痕跡を挙げていけば限りがない。本稿ではその大まかな流れを記述するに留めたい。

古くは旧石器時代、人間が自然の恵みに依存する度合いが高かった時代においては、食料としての動物を中核とする「富」が人々の最大の関心事であった。富を産出する自然への依存は母なる自然への崇拝という観念を生み、自然の富の授与者としての「大母神」、「地母神」への信仰が宗教の中心になった。旧石器時代から現在まで変わることなく存続している狩猟・採集中心の社会では大母神の後継者として、「動物の女主人」、あるいは「山の（女）神」が崇拝されている（松村　同書)。

また松村 (1999) によれば「新石器時代において、農耕、牧畜が開始されると、伝統的な狩猟・採集を続ける社会を除いて、「大母神」は新しく登場してきた職能女神によって置換される。農耕・牧畜社会では、文化による自然の支配、管理、改良が顕著となる。(中略) 大母神の観念よりも文化によって変えられて富を生み出す自然、文化に支配された自然の観念が優越してくる。」この段階においては、自然の富の象徴である女神、母神は文化の下に位置づけられる。文化をもたらした男神のほうが、自然を生み出した女神より上位に位置づけられるようになる。ここにいたって、母権社会から父権社会への移行を見出すことができるだろう。「自然＝女性に働きかけ、自然を利用して富みを生み出すのが、文化＝男性とする見方が生まれる。自然は利用されるために作り出され、人間＝文化の利用に供される対象と考えられるようになる。生み出し、与える存在としての女性、母のイメージに代わって、生み出させる男性、父のイメージが宗教においても優越する時代となる」と松村はその著書の中で述べている (1999　32頁)。およそ、筆者もこの説明に同意見である。もう一点加えるとするならば、詳しくは後述するが、狩猟・採集の文化から農耕・牧畜文化へ移行するにあたり、「動物の女主人」の類ではない地母神が崇拝されたことがあるのではないか、という論である。狩猟・採集の文化から農耕・牧畜の文化に推移したということは、人間の富は田畑から収穫される農作物に左右されることになったはずである。多くの農作物が収穫できるように、と穀物の女神に祈りを捧げたその痕跡も多く見つけられている。穀物の女神も松村が言う職能女神の一種に数えることができるかもしれないが、自然を支配する男神の権威が強まるその一方で、地母神の子孫も生き残っていたのかもしれないと筆者は考えている。穀物の豊穣を祈願する祭礼としてアプロディテとアドニスの聖婚を模した儀式の例が知られている (Qualls-Corbett　訳書　1998)。農耕文化における豊穣の女神と若き植物神の結合は大地の豊穣を約束すると考えられていたために、そのような儀式が行われていた、と想像できる。この時代の豊穣をもたらす地母神は前時代のそれとは幾分性格を異にしているかもしれないが、生と死を司り人間に富をもたらすという点では、両者は間違いなく同じであるだろう。その支配領域が山野、そこを駆け巡る動物から、田畑とそこに育つ農作物に変わったということかもしれない。生活を営む場所によって人間の崇拝する神の性格が異なることは良く知られていることである。

ここまで地母神と呼ばれる女神について大まかな系譜を説明してきた。世界中に地母神と呼びうる女神は数多く存在していることから、その個々については挙げてこなかった。私たちに身近な神話を参考に、その極一部を例示してみたいと思う。旧石器時代の地母神の系譜に属すると思われる女神としてアルテミス、農耕文化の地母神の系譜に属する女神としてデメテル、を各々説明しておく。同じギリシャ神話の女神にアプロディテという女神がいるが、彼女も地母神の流れを汲むと言われている。近隣の神話を参照するだけで、似通った神話を持つ女神たちが数多く見つけられる。シュメールのイナンナ、イシュタル、エジプトのイシス、フェニキアのアスタルテ、ローマのウェヌス、フリギアのキュベレなど。イナンナとドゥムジ、イシュタルとタンムズ、キュベレとアッティスというペアは全て、地母神と若い恋人という組み合わせである。これはアプロディテとアドニスのモチーフと同じテーマを持つと考えられている。

話を元に戻して、次ではアルテミス、デメテルについて紹介する。

2—1　「動物たちの女主人」：アルテミス

西洋近代の文学、絵画などでは、ギリシャ神話のアルテミス（ローマ神話ではディアナ）という女神を「自然のままの山野で獣を追って駆けめぐる、うら若き処女神」として描いてきた。彼女は太陽神アポロンの双子の妹としてゼウスの娘に組み入れられたが、このイメージと彼女が本来持っていた性格には少々隔たりがある。ここでは父権制の神話に取り入れられる前のアルテミス像、地母神としての彼女が備えていた性格やイメージについて説明したい。アルテミスはそもそも土着の女神であり、父権的な色彩の濃いギリシャ神話に取り入れられる際に、その性格が変化していったと考えられている。

古典期の形態が完成する前のアルテミスは、野生の獣を中心としてあらゆる生命の死と誕生、成長を司る、古い地母神の性格を持つ女神であった。『イリアス』では「獣の女主人」、「女猟師、狩りを好む」などという形容辞や尊称を捧げられている。他には『ホメロス風讃歌』における「鹿殺しの、鹿を狩る」という形容辞、「処女の、清らかな、（血によって）穢れていない」（『オデュッセイア』）、「生むことをせぬ」（プラトン『テアイテトス』）、「生みの、出産の」（エウリピデス『タウリケのイピゲネイア』、『救いを求める女たち』）というようなのもある。アルテミスの宗教儀礼としては、スパルタの娘たちのそれがある。スパルタの娘たちは隣国アルカディアに近い、カリュアイ「クルミの木」という名前の地の森の入り口にあったアルテミスの神像の前で歌と踊りを奉納した（パウサニアス、松村）。また「スパルタ近くの川の沼沢地にあったリムナイオン「沼地のアルテミスの神域」ではアルテミス神像の前で、「かつては籤で選ばれた者が人身御供として殺され、その血で祭壇を染めた。リュクルゴスがそれを若者たちが笞打たれるように変更した。そして今日でも祭壇に血を流すのである。」（パウサニアス、松村）

「アッティカのブラウロンは国境近くにあり、海と川に隣接するアルテミスの聖域だが、アテナイの七歳から十一歳の少女たちがそこに赴いて、トーチを手に踊ったり走ったりして、「雌熊を演じた」。」（アリストパネス、松村）

以上のような資料からは次のようなアルテミスの特性が見て取れる。獣、特に鹿、山野や沼地や森の活力や生命力、産婆、子どもや若者の養育などとの関連をアルテミスに認めることができる。松村はアルテミスを「境界と通過儀礼の女神」と想定し、考察を行っている（1999）。以下に引用する松村の記述はアルテミスの女神としての機能を極めて端的に表しているように思われる。

カリマコスもいうように、アルテミスは人間の住む都市にはやって来ない。人間の方が女神に会うために自然の中に出かけていくのである。そして女神の神殿、神域、祠は自然の世界のなかでも森の入り口、沼沢地、河口、海辺などに限定されている。（略）それは文明と野生、文化と自然の境界となるが、確固とした固定されたものではなく、自然状態の変化に応じて森から荒れ地へと、あるいは陸地から水面へと姿を変える曖昧な領域である。つまりそこは文明と野生、文化と自然が交差、共存する場所なのである。そして同時に、それは訪れるものに変容をもたらす場所でもあるだろう。

古代ギリシアでは、子供や若者はまだ野生の存在であり、本当の人間に、つまり文化的な存在になるためには通過儀礼を経て、変容しなければならないと考えられていた。ブラウロンに集まったアテナイの少女たちは、野生の熊を象徴する衣装を脱ぎ捨てて、文化的存在へと生まれ変わる。アルテミスを野生から文化へ、そして文化から野生への移行を司る女神と考えるならば、女神が荒れ地と耕地の、野生と文化の境界領域に位置し、子供や若者を守護することも無理なく説明できる。アルテミスは野性的存在である子供・若者を文化的存在である大人に変容させる存在であるからこそ、女神自身は都市には入らず、永遠の処女として境界領域に留まり続けねばならない。野性的存在である子供の女神であるから、アルテミスは子生みの守護もするし、その神話的表現が「産婆」なのである。（松村　同書　p198－p200）

2—2 大地女神：デメテル

デメテルの伝承に欠かせない存在といえば、その娘ペルセポネ（コレー）である。両者は殆ど対をなす形で、神話・伝承でも語られている。キャンベルが二人の女神について纏めた記述に次のようなものがある。「デメテルとコレ（ペルセポネ）は一人の神であって、二人の人間なのである（ハリソン『プロレゴーメナ』）。」（Campbell 訳書 1995）また、喜多（1994）は以下のように述べている。

野原で遊んでいた彼女は突然裂けた大地の下に引き込まれ、死界の王に拉致されてその后にされる。つまり殺されたのである。しかし彼女が死にっきりになるのではないことは、古代ギリシアの印章や壷絵にもしばしば表された、彼女が幼児を抱いて大地から抜け出ようとしている図柄に明らかである。エリッヒ・ノイマンによれば、この時点での彼女は既に強奪されたコレーではなく、結婚（＝略奪＝殺害）により少女から変容した女であって光（多産の意味を持つ）の息子をあげた母である。これは「娘が母と同一であり、母となり、みずから（母の＝喜多注）デーメーテル*に変容」したことを表すと言う。

デメテルについて語る際にペルセポネを欠かせない理由はこれらの説明で十分であるだろう。またPereraは次のように説明している。コレーは「母なる大地（デメテル）の内なる霊魂の表象である」（Perera 訳書 1998）。コレーすなわち、ペルセポネは「ギリシャ神話ではゼウスとデメテルの娘とされ、強奪されてハーデースの妃となる。デーメーテール*が失われた娘を求めて、世界を巡るが、ハーデースが娘を奪ったことを聞き、ゼウスもこの計画に加わっていたことを聞き、天界を捨てた。そのため、大地は実らず、人々は困った。そこでゼウスは娘を返すようにハーデースに命じたが、娘は帰る前に石榴の実を食べてしまったため、一年の三分の一は冥界に暮らすこととなった。デーメーテール*とペルセポネー**はエレウシースをはじめ、ギリシャの地の秘教の二大女神であって、コレーの名前で敬い畏れられた。」デメテルが姿を消した娘を探し回った際の神話・伝承がおそらくはエレウシスの秘儀の根本となっていることは良く知られている。エレウシスの神秘劇については多くが秘められたままである。「刈り取りという死、種蒔き、そして植物がふたたび生命を得るという農業サイクルに象徴され」る重要な主題を孕んでいるのではないか、と推測されるに留まっている。その重要な主題とは「死と、地下への下降と、その後の再誕生というサイクルと非常に密接にかかわって」いる（Campbell 訳書 1996）。

また、先の喜多の著書によれば、あの光の息子は、「エレウシスの秘儀において暗闇の中でゼウス（に扮した男の司祭）と交わったデーメーテル*（に扮した女の司祭）によって神子（豊饒の神プルトス）が産み落とされると同時にいっせいに明りを灯される、紛れもなくこの光の中に呱々の声をあげる豊饒の子神と同一存在と考えられる」。またこの理由によって、ペルセポネはデメテルと同一になる、と考えられている。「コレー（少女）は結婚＝殺害によって、大地の母としてその象徴である穀物の《穂の衣》を身に纏い」、あるいは「穀類の母」として麦の播種を司るデーメーテル*、尽きせぬ豊饒（産み出す）能力を身内に備えた「母」となったのである。」（喜多 1994）

*デーメーテール、デーメーテルともに、デメテルと同じ。
**ペルセポネーはペルセポネと同じである。

2—3 地母神の系譜のまとめ

地母神のモチーフは臨床心理学、とりわけ深層心理学の分野において重視されている。ラーナーの「昔は彼女［大女神］の属性にはあらゆるものが含まれていた。彼女のセクシュアリティは誕生、死、再生と関連があり、善悪、生死の力を持っていた。母・戦士・保護者・威圧的な男神の仲裁者など多様な性格を持っていた」というような女神の性格が、深層心理学の言うところのグレートマザーの性格と重なる部分があるからなのだろう（Neumann 訳書 1982）。慈しむ母、与える母というグッド・マザーの側面と、呑み込む母、貪る母というテリブル・マザー両方の側面を、大女神という象徴が備えていることは明らか

である。だが、グレートマザーという概念から示される女性の霊性は、産む、殺すといった母というシンボルの霊性を表しているに過ぎないように思われる。それはグレートマザーという言葉それ自体からも明らかではないだろうか。アルテミス、デメテル、ひいてはペルセポネという女神のありようから見出される大女神の霊性はそれだけではない。グレートマザーと呼ぶのに相応しい霊性も女神たちは備えているだろうが、それだけではない霊性も備えているように読み取れる。グレートマザー的な霊性を備えているとは言い難い女神の存在も、そのような女神の霊性を語る上での手助けとなるだろう。このような女神をいわゆる職能女神と呼ぶのには躊躇いがある。職能女神とは、時代を下ると共に大女神の機能が分化していき、大女神が備えていた霊性、すなわち職能が様々な神々に振り分けられていったその結果生まれた女神と言えるだろう。有名な女神、アテナは知恵、戦争、機織の女神と言われている。こういった職能女神たちは、女性の霊性の一部分をそれぞれ請け負っているのかもしれない。

次の項では地母神、と呼ばれなかった女神について説明を加えたい。また本項で地母神の系譜に連ねた女神の中からも、グレートマザーという概念だけではとらえきれない女性の霊性について考察を行いたいと考えている。母、子の極めて原初的な関係をはじめとして、女性がになう役割は多い（男性も同じくらい多いだろう）。その全てに女性の霊性は備わっているだろうが、そういった職能に振り分けられる以前の、女性のより根源的な霊性について論じる。

3 処女神と呼ばれた女神

これまで説明してきた「地母神」なる存在は、女神という大きな枠組みの中の一つのカテゴリーであるように思われる。女神には様々な種類があるだろうが、「地母神」と同じほど歴史も古く、また同じほど意味を持って語られるカテゴリーとして「処女神」と呼ばれる女神たちがいる。処女神とは、夫を持たない女神、男性を寄せ付けない女神、という特性によって説明される。子の有無は関係ない。ギリシャ神話の処女神、アテナは、彼女にかけられたヘパイストスの精液を拭い取るという形で養い子エリクトニオスをもうけている。日本のアマテラスもスサノオと交わしたうけい誓約の最中に、五柱の神を生している。

処女神、つまり男性と交わらない女神であるのに、子を生しているとはどういう意味があるのか。この疑問にしては、以下のような説がある。それは、歴史すなわち神話・伝承を記述した男性の側の問題ということである。

処女性を失わないまま偉大な男性を生んで母となる女神を「処女母神」と呼んで、その例としてアテナ、マリア、アマテラスを挙げ、そうした現実にはありえない女神の構想したのは、男性から女性の要素をできるだけ少なくしようとする試みがあったのではないかと論じたことがある。（松村　1992, 1996, 1997）。（中略）キリスト教は別にして、記紀神話とギリシア神話の場合、子供を儲ける契機を提供する男神は生まれた子の父であることが強調されない。むしろ「母の子」とされるのである。ここには女性的要素を否定しようとすることが、逆に男性的要素を否定して女性的要素を結果として強調するという、一種の「捩れ」が起こっているともいえる。しかしこういう形で女性の存在を限定的に残し，その女性像を男性的あるいは非女性的（現実の女性にはありえない「処女母」という姿）とすることで、つまり例外的な女性像とすることで、現実と理想の矛盾を解決しようと試みたとも考えられよう。（松村　同書　p172）

特にアテナイの守護神として祭られていた処女神アテナに対しては以下のような見方もある。すなわち古代ギリシア、わけてもアテナイの男子は女性に対して思慕と恐れという両価値的な感情を抱いていたのではないか、というスレーター（1968）の考察である。彼によれば、性区分が厳格であった古代ギリシアにおいては、市民の妻たちは屋外で自由に活動することも禁じられ、家庭内に半ば監禁されていた（アテナイの市民権を与えられていたのは成人男性のみである、ということを付け加えておく。女性たちに市民権は与えられなかった）。抑圧され、無視され続けた妻たちは夫にぶつけられない不満や憎しみの感情を、愛情を注ぐ傍らで我が子（男子）に伝えてしまった。こうした母親の男性に対するアンビヴァレントな感

情をアテナイの男性は受けて育ったために、彼らはその裏返しに女性に対してアンビヴァレントな感情を持つようになったのではないかというのである。守護神アテナは、母親そのままであってはならない。

母親に対する感情はアンビヴァレントなのであり、包み込み保護してくれる安心感の裏側には、自立を妨げ心理的に同一化・一体化される不安、つまり「呑み込む太母」への反発や恐怖も存在するからである。母であり、同時に母でない女性、それが処女母である。(略) こうしてアテナは「結果として」母であるが、武装し、女らしい (と文化的に規定される) 感情を持たず、性を拒絶し、性のゆえに変化することのない女神とされたのであろう。母にして処女であり、女にして男の価値基準を持つアテナは、母・女性の守護・保護を無意識に求め、しかし女性蔑視や女性恐怖症の感覚とは抵触しないというアテナイの男性市民の夢想が生み出した理想の女神だったと思われる。(松村　同書　p80)

この見方は、男性の女性忌避の心性を見事に言い当てているものと思われる。アテナに限らず、聖母マリアの処女懐胎についても類似した考察がなされていることからも、それは明らかである。この見方によって、女神が信仰されてきたことに対する男性の側における理由が一つ明らかになったとして、では、女性の処女神信仰についてはどうだったのだろうか。信仰していたとするならば、その理由は何なのだろうか。女性は処女神のどのような神性に惹かれたのか。話が少々脇道にそれてしまったかもしれないが、この観点から考えてみると処女神と呼ばれた女神の霊性について新たな知見を得られるように筆者には思われる。女性忌避、母性への恐怖という処女神信仰への理由づけは一義的であって、ある意味で女神の本質に迫るだろうが、それだけでは見落されているものもあるのではないか。アテナと同じギリシャ神話の女神にヘスティアという処女神がいる。彼女は男女問わず広く信仰を集めた処女神であった。女性にも信仰されていたという点を重視してみると、今述べてきたような理由のみでは説明がつかない処女神の側面が浮かび上がってくる。その側面こそ、これまであまり語られてこなかった女神の隠れた「霊性」であるのではないか。それゆえに、母という側面で語られない女神の霊性を見出すよすがとして、本稿では「処女神」を取り上げたいのである。デメテルとコレーではないけれども、母を語るということは、いつかはそうなるべき存在としての娘をも語ることになるのではないだろうか。母－娘という霊性以外の女性の側面を見るということは、いわゆる血のイニシエーションと呼ばれる女性の側面以外に目を向けるということである。処女神の霊性について語るとき、少女から女へ、女から母へというプロセスとは別の次元での女性の霊性を語ることになるように思われる。

3－1　竈の女神：ヘスティア

ヘスティアはギリシャ神話の処女神であるが、彼女の神話は殆ど残されていないと言っても差し支えない。ヘスティアに関しては藤澤 (2003) に詳しいので、以下に引用しておく。

ヘスティアはクロノスとレアの娘であり、ハーデース、ポセイドン (海神)、ゼウス、デーメーテール、ヘーラー (ゼウスの妻) 兄弟姉妹の長姉である。ローマ神話のウェスタと同一とされている。ヘスティアは炉もしくは竈の女神であり、家庭を守る女神とされていた。彼女の起源はギリシャ神話より古く、母権制の時代の女神であったと言われている。母権制の時代、家庭は個人の『世界』であった。その中心に座すヘスティアの竈は世界の中心であり、つまりヘスティアはその時代、世界の中心を表していたと考えられている。ピタゴラスはヘスティアの火を大地の中心であると言った (Lethaby　1975)。ヘスティアはまたギリシャ神話では結婚の庇護者ともされている。だが、ヘスティア自身は未婚の女神であり、アテーナー、アルテミスと並んでアプロディテの力の及ばない永遠の処女神と目されていた。ヘスティアの神殿に仕える巫女は女神に倣い、純潔を守らなければならなかった。ローマでは、Vestal Virginsすなわち『ウェスタの乙女』と呼ばれ、6人の乙女がウェスタの神殿を祀っていた。純潔を守れなかったウェスタの乙女たちは大地に埋められるという厳しい罰を受けなければならなかったと伝えられている。

ウェスタはローマの守護神であり、彼女の火は決して絶やされることがなかった。全ての家庭、つまり

あらゆる人々からウェスタ＝ヘスティアは祀られ、食事の分け前は最初に彼女に捧げられた。ウェスタの祭りでは神殿の蔵が開かれ、主婦たちが供物を捧げたと言われているが、以上のことからヘスティアは古代ギリシャ・ローマの女性にとって非常に重要な女神であったと想像することができる。

またキケロは次のように言っている。「ウェスタの力はすべての祭壇や竈に及んでおり、しかも「この女神は最も内なる者の守護者であるがゆえに」、すべての祈祷や供犠は彼女に始まって彼女に終わる。」(Dumezil　1970) Larousse Encyclopedia of Mythology (1968) によれば、ヘスティアが夫を持たなかった理由をこのように説明している。つまり、彼女が司る純粋に宗教的・母権的な領域にあっては、男神の分担すべき役割が皆無だったからである。ヘスティアについては「天界の「天界の住まいの中心に座して、生贄の最も上等の部分を受け取り、しかも、神々の中で人間界の男たちから最も敬われている女神」と言われていたとしている。」(Larousse Encyclopedia of Mythology　1968)

ヘスティアに関するこれらの記述をあわせて読み解くと、次のような姿が浮かび上がってこないだろうか。ヘスティアとは男性・女性を問わずに信仰を集めた女神である。彼女に祈願したのは自然からの恵みではない。それは彼女自身が「産む」という女性の力とは縁遠いところにいるからである。しかし、かといって、ヘスティアが男性の側の理想を重ねられただけの女神であるかというとそれも違う。男性が処女神を作り上げるようになったのは、おそらく父権制の時代に下ってからである。ヘスティアは、オリンポスの神話が確立された父権制の時代より起源の古い母権制の時代の女神なのであり、これは彼女が処女である理由が男性の側の問題に拠るのではないということを意味している。彼女は自ずから処女であった。本来の処女神は、そもそも自ずから処女なのである。作り上げられたのではない処女神として、ヘスティアは、古来の名残を残す数少ない女神であるように思われる。

ヘスティアの記述で目につくのが、「世界の中心に座す」、「最も内なる者の守護者」、「天界の住まいの中心に座す」というものである。これらはどう言った意味を持つのか。彼女が支配するそのような領域を「職能」と呼ぶことははばかられる。ヘスティアは人間のより根源的な領域を司っているように思われるからである。ヘスティアは火を司っており、オリンポスの祭壇の火も彼女の支配する領域であったと見なされている。人間が祀る火も同様である。火は人間の意識を象徴するとも考えられている。ヘスティアというのは神像（偶像）を持たない稀有な女神であり、具象的な女神像の代わりに火を崇拝の対象としていた。ここからも、彼女が支配する領域は、「職能」と呼ぶにはふさわしくなく、より根源的な領域というべきであろう。多情で名高い最高神ゼウスでさえ、彼女に求愛することをしなかった。彼女に捧げられたゼウスのそうした敬意からも、彼女の女神としての地位の高さを見ることができるはずである。

3—2　処女神の特徴

竈、火の守護神である処女神ヘスティアについて説明を行ってみた。ここから地母神と同じくらい古い起源を持ちそうでありながら、地母神とはまた別の領域を司る女神の姿が浮かび上がってくる。処女神は、より厳密に考えてみると、男性を受け入れない、配偶者を持たない、という点によっては特徴付けられないことに気付かされる。なぜなら最も原初的な母神においては、まず自ら存在し、自ら産み落とした子と交わり、また産み落とすことが認められているからである。ギリシャ神話ではガイアがその例に当たるだろう。むしろ太母それ自体がそのように特徴付けられると考えても良い。原初の男神においても、同様に単独での子産みは見出せるが、これはまだ世界が混沌としていた時代の神であることから母神の要素と父神の要素が分離しきっていなかったことがその理由ではないかと考えられる。産む、という力はやはり母神に属するのではないか。

太母ほど根源的な存在でなくとも、地母神についても、旧石器時代まではそのような特徴が認められると言われている。「宇宙のはざまにただ独りあって、神々を、万物を、ただ産みに産む、それが大母神の有様で」ある（喜多　同書　p43)。「ただそこに在り、無条件で産み、ただ産み続ける－それが大母神であり、大母神に対しての太古の人々のイメージであり、信仰であったと思われる。そうした信仰は長い長

い間続いた。石田英一郎も言う、「植物の採集、ひいてはその栽培に人間の生活が依存していた社会、そうしたいとなみの担当者としての女性の地位が中心的な社会にあっては、この種の母神の配偶者となるべき男性を必要としなかったらしい。生まれることなくして太古より存在した彼女はみずからの力において一切を産み、万有を育み育てた」、と。」(喜多　同書　p40)

独りで子を孕むことが地母神、大女神、大母神と呼ばれる女神を特徴付ける点と考えられるならば、では、処女神を特徴付ける点はどのようなものになるのか。地母神と処女神を区別するのはどのような特徴を以ってであるのか。考えられるのは、「産まない」ということだろう。地母神は産むという力こそが彼女の豊饒性と繋がっており、それが母という側面に至り着く。一方処女神は産まない女神である。しかし彼女らは産まないからといって、その地位を貶められない。古代のギリシャでは、子を産んで初めて一人前の女性として社会から認められる、と言われているにもかかわらずである。同時代のヘスティアに対する信仰からにより明らかだろう。「産まない」ということ、これが処女神の特徴の一つになることは間違いないように思われる。このように定義しなおしたとき、あるいはアテナは処女神というカテゴリーからは外れるのかもしれない。一方で、冥府の女王と呼ばれるペルセポネが想起される。冥府という不毛の世界で女王の地位についたペルセポネは、夫を持ちながらも、決して子を生すことはできなかった。ギリシャ神話の神々は交わればすなわち子を生すとされており、そのような神々の中で冥府の神々は一種特別であるといわざるを得ない。このような不妊が冥府の神々の特徴とされている(Devereux　訳書　1982)。この産まない女神(産めない女神というべきか)という特徴において、ペルセポネも処女神と見なすことはできるのだろうか。彼女を「処女神」と呼ぶ場合がないわけではない。とは言うものの、ハーデースという夫を持つペルセポネを処女神に分類して良いのか、そうでないのかを考えるためにも、もう少し「処女神」に関する考察は必要だろう。「産まない」女神にどのような神性(言い換えれば職能)があるのか。何を以って彼女たちが崇拝されたかをもう少し詳細に考察してみよう。処女神と呼ばれる女神の中から子を産まない女神を取り上げ考察してみる。

3—3　「産まない」女神としての処女神

これまで紹介してきた女神たちは全てギリシャ神話中の女神である。まずは同じギリシャ神話の中で、処女神と呼ばれた女神たちを改めて挙げてみる必要があるだろう。ギリシャ神話の処女神というとき、主に挙げられるのはアテナ、アルテミス、ヘスティアの三女神である。彼女たちはギリシャ神話の中でも最も高位とされるオリンポス十二神に属すると考えられるため、何事においても代表的な神として挙げられることが多い。ギリシャ神話の最も著名な処女神というときこの三女神が挙げられる、というほうが適切だろう。この三女神に関しては、ここまでで既に紹介が済んでいる。注目すべきはおそらくはアルテミスである。アルテミスは処女神と呼ばれる一方で、原初の地母神の流れにも属する女神とされているからだ。処女神とは産まない女神であると考えるとき、ここには幾分矛盾が生じる。地母神とは、彼女の産む力のゆえに豊穣を祈願される女神であって、処女神は産む力以外の機能を期待される女神であるからである。アルテミスという女神についてはもう少し整理が必要だろう。

アルテミスが旧石器時代の地母神、大女神の系譜に属する女神であることは、先に説明したとおりである。このような地母神は「山の(女)神」と呼ばれるが、アルテミスに捧げられた形容辞にもこの意のものが見られることから、アルテミスは「山の(女)神」であると考えられる。「山の(女)神」とはどのような女神か。答えは簡単である。その起源を旧石器時代以来の大母神に有する女神のことを言う。つまり、大母神の特徴を色濃く残した女神のことを言うと考えれば良い。山の(女)神の伝承には配偶者の影は薄く、純粋に大母神の単独性を示すとも言われている。山の(女)神は彼女が管轄するところの、もっと正確に言えば彼女自身である「山」の中に独りあって子産みをなす。このような女神が「山の(女)神」と呼ばれているのである。アルテミスに話を戻そう。アルテミスは一部でこの「山の(女)神」の特徴を備えていると言われているが、一部異なる特徴もあるとされている。「山の(女)神」は必ずしもつねに若く美しい処女神であるとはされておらず、そこがアルテミスの問題なのである。

古典期の形態が完成する以前のアルテミスは、確かに「山の（女）神」と呼んで差し支えない特徴を備えていたと考えられている。旧石器時代以来の大母神、つまり古典期の形態が完成する以前の大母神は、「生命すべての与え手であり、したがって美醜、老若、母娘という区分を超越し、それらを内包する存在であった。」（松村　同書　p188）アルテミスについては彼女の原初の形から様々な要素が抜け落ちていき、そのうちいわゆる「処女神」のイメージが確立されたと考えることができる。アルテミスが備えていたと思われる、獣の女主人という全体像から、醜さ、死、恐怖などの要素が蛇の頭を持つゴルゴンに、夜と冥界の側面がヘカテに分離し、処女神アルテミスが出来上がったと考えることができるのである。時代を下っていくにつれて、大いなる女神から職能女神に分化していく、という説明でアルテミスの問題は理解できるだろう。ではここで、改めて「処女神」アルテミスに目を向けてみたい。太古の地母神でなくなったアルテミスは何を以って祀られていたのか。処女神となった彼女の霊性はどのようなものであったのか。これを読み解くとき、「処女神」なるものの霊性について一つの手がかりを得られるように思う。アルテミスという女神特有の霊性すなわち職能もあるだろうが、同じ処女神ヘスティアの霊性と並べて読み解いてみると、彼女たちの個性とは次元を異にする「処女神」なるものの霊性について新たな知見が得られる。いや、そもそも「処女神」の霊性も、「地母神」の霊性もすべて備えていたと考えられる最も原初の女神の中にも、「処女神」の霊性を解き明かす手がかりは潜在しているだろう。古典期以前のアルテミスにも目を向けてみたい。

大いなる女神であったアルテミスが備えていた霊性は、ゴルゴン、ヘカテという女神の姿から想像できる。ゴルゴンについてはここでは述べないことにしておく。ゴルゴンはそれだけで多くを語ることができるモチーフであり、ここでは記述しきれないからである。今言えるのはこれだけである。「彼女はあらゆる存在の生であり死であり、世界の子宮であり墓である黒い時間、原初の一にして唯一の、自然の究極のリアリティで」ある（Campbell　訳書　1995　38頁）。ゴルゴンは、アルテミスの地母神としての否定相のみを分離させられたように見えるかもしれないが、蛇の頭髪を持つ彼女にはそれだけでは言い表せないイメージがある。

では、原初のアルテミスから分化した女神、ヘカテについて考察を行いたい。ヘカテは古いギリシャの女神とされている。以下は『ヘカテ讃歌』からの引用である。「大きな獲物をいとも容易に授けたり、目の前に現れた獲物を造作もなく奪ったりなさるのだ。」他に、「畜舎の家畜を殖やす」「子供らの養育者」などという、アルテミスと共通する特徴も認められる。だがヘカテはそれだけではない。冥界の恐るべき女神として描かれている。有名なアルゴー船の物語で王女メデイアが祈りを捧げるのはヘカテに対してであり、それはヘカテの魔力を請うためのものであった。ヘカテはまた夜の女神として松明を持つ姿で描かれることがある。彼女はこのとき辻に立つ女神、道守神として見なされている。この道守神としてのヘカテは三つの顔を持つ女神とされ、彼女はヘカテ・トリヴィア（「三叉路のヘカテ」：三叉路を守護する女神とされた）と称された。ヘカテの三相は天界・地上・冥界をそれぞれ支配する。天界では月の女神セレネ、地上では女狩人アルテミス、冥界では死の女王ペルセポネの三相をとる、と言われている。また三体一相の女神のうちの一相が老婆ヘカテ、他二相は処女ヘベ（ゼウスとヘラの娘）、母親ヘラであるとも言われている。いずれにせよヘカテを冥府の女神と呼ぶとき、我々は何かを思い出さないだろうか。ペルセポネとヘカテが密接な関係を持つのは先に述べた通りである。ペルセポネと同じ冥界の女神であるヘカテが子を産まないことは言うまでもない。

3—4　処女神の霊性

前項で処女神と呼ばれる女神たちについて論じてみた。処女神の霊性を探る上でとりあえず手がかりにできそうなのは、ヘスティア、アルテミス、ヘカテという女神たちであろうか。人間に個性があるように、この女神たちにも個性はある。違う領域を司るがゆえに生じる個々の霊性はそれとして、その霊性に共通するものはないかを見てみたい。地母神と呼ばれる女神たちが産むという力を背景に、生と死もしくは死と再生を司っていたというように、処女神たちには処女神たちに共通する霊性があるのではないかと筆者

は推測している。このような推論を立ててみた。それは、彼女たちが異界、人間たちが住まう日常の世界とは異なる世界と繋がっているということである。ヘスティアは火、竈を通じてオリンポスという神の世界と現実の世界を繋いでいる。アルテミスは前述したとおりである。彼女はそのまま境界に存在する女神である。野生と文化の間に立ってその間を取り持つ女神ということで、彼女と異界とのかかわりは理解することができるだろう。ヘカテは辻に立つ女神と言われている。彼女もまた日常の世界と非日常の世界を繋ぐ女神である。アルテミスが野生と文化という対立の間を繋ぐのであれば、ヘカテは夜の世界へと導いてくれる道守神である。処女神たちが繋いでいる世界、道を開いてくれている非日常の世界というのは、それぞれ違うものであるかもしれないが、全てわれわれ人間が現実に生きている世界ではない場所として括ることはできるだろう。しかも彼女たちの道の開き方は、「死と再生」を意味しない。彼女たちが開いてくれている異界には死者の世界もあるとはいえ、そこに繋がることがすなわち「死と再生」を意味するとは思えないのである。そこに、処女神と地母神のこの上なく大きな差があると考えられる。

「死と再生」のプロセスを経ることと、異界に繋がることの間には差がある。まず第一点として、「死と再生」のプロセスは変容のプロセスと考えられるということである。そのプロセスを経験する前と後とでは某かの変化が生じているはずであり、例えば、娘としての自我が死んで、母として生まれなおす、といった変容が生じていることが「死と再生」のプロセスであると考えられる。蛇が脱皮するさまを思い浮かべる人もいるかもしれない。これまでの自分が死んで新たなる何かが生まれていなければ、「死と再生」のプロセスを経たとは言えないだろう。これはいわば「行う」経験である。通過儀礼がそうであるように、過ぎてしまったら「状態」として残るものではない、と考えられる。死と再生のプロセスを経た結果、その影響が残るということとは勿論話が別である。「死と再生」の状態にあり続けるというようなことはない、と表現するとわかりやすいかもしれない。

一方、異界に開かれている、異界と繋がっているということは、「状態」である。異界と繋がっているとき、人は非日常の力を身につけた状態、言うなれば魔力を身につけたような状態にあると感じるかもしれない。異界への道が閉ざされてしまえば魔力は消え失せ、日常の世界に立ち戻ってくる。これは変容のプロセスではないので、自我に変化があるわけではなく、異界と繋がっている間に限られて非日常の力を身につけられているという、まさに「状態」の問題であると言えるだろう。「死と再生」とは、冥界へ下って、再び地上に戻ってくる経験だが、それはイコール「異界と繋がる」ことを意味しない。「異界と繋がる」ということは、日常の世界にありながら非日常の世界への道が繋がっているというまた別の次元の話だからである。

地母神が司るのが「死と再生」という変容の過程であるとするなら、処女神が司るのは「異界に繋ぐ」という「状態の魔力」ではないか。このように考えると、処女神の霊性というものについて一つの仮説を成立させられる。異界に道を開くことで非現実的な力を現実において身につけさせてくれる、それが処女神の霊性であるという仮説である。神話・伝承において、英雄に力を貸す処女神の姿も時折見かけられるが、それはこの仮説から説明がつくように思われる。産む力に拠る霊性すなわち地母神のそれは偉大だが、それだけが女神の霊性であるというのは乱暴である。産むという偉大な力の影になり見落されがちになっていたまた別の女神の霊性がありうる。処女神の霊性を語ることで、女性のそれについての新たな洞察が得られたとすれば、幸いである。

4 まとめ

本稿では、地母神と呼ばれる女神との対比から、処女神という女神のイメージについて考察を試みてみた。日常に留まらせながら「異界へと繋ぐ」という処女神の霊性を仮定することができたのではないかと思う。では、「異界に繋がれ」ているとき人はいったいどう変わるのか。「異界に繋がる」ということは人にどのような影響を与えるのか。

筆者は「死と再生」のプロセスを司る女神——地母神と対比させ、処女神を仮定してみたが、各々が司る領域は、そのまま人と人との関係のあり方をもイメージさせるように思われた。異なる性を持つもの同

士が結びつくときには、そこでは化学変化にも似た強烈な変容が生じるのであり、こうした結婚による変容とも言うべきものは「死と再生」のプロセスと考えることができるだろう。一方、このような変容が生じない関係というのも考えられる。例えば同性同士の関係においては、異性間の結婚のような変容が生じるとはこれまで考えられてこなかった。しかし「死と再生」のような変容が生じないからといって、そのような関係が人にとって無意味であると断言するのは暴論だろう。処女神の霊性について考えると、「死と再生」を伴う変容とは異なる変容体験を想定できるのではないかと感じる。劇的な変容体験ではないけれども、今の位置に留まりながら繋がることに意味がある、そのような空間、時間について考えることができるだろうか。処女神に関する考察はまだ始まったばかりであり、明らかになっていないことのほうが多いくらいである。今後研究を進めていく中で、このような女神の霊性が人間にとってどのような意味を持つのか、より具体的に考えることができればと思う。

＜参考・引用文献＞

Bachelard,G　1938 La psychanalyse du feu, Collection Psycologie 7, Gallimard, Paris　前田耕作訳　『火の精神分析』せりか書房　1999

Campbell,J The hero with a thousand faces　『千の仮面を持つ英雄　下』　平田武靖ら訳　人文書院　1984

Campbell,J 1964 The masks of god ; occidental mythology New York : Viking　『神の仮面　：西洋神話の構造』　青土社　1985

Campbell,J　1990 TRANFORMATIONS OF MYTH THROUGH TIME　『時を越える神話』　飛田茂雄訳　角川書店　1996

Devereux,G.　1982　FEMME ET MYTH, Flammarion　加藤康子訳　『女性と神話－ギリシャ神話に見る両性具有』新評論　1994

Dumezil,G.　1970　Archaic Roman Religion(2 vols.)　Chicago　: University of Chicago Press,

藤澤佳澄　2003　「女性が女性と結びつくということ～関係性に関する一考察」　大阪大学心理教育相談室紀要　近刊

喜多路　1994　『母神信仰』　錦正社

Lethaby,W.R.　1975　Architecture, Mysticism and Myth.　New York : George Braziller,

松村一男　1999　『女神の神話学-処女母神の誕生』　平凡社

Larousse Encyclopedia of Mythology 1968 London : Hamlyn Publishing Group Ltd.,

Neumann,E. 1972　The great mother : an analysis of the archetype　Princeton, N.J. : Princeton University Press　福島章ほか訳　『グレート・マザー：無意識の女性像の現象学』　1982　ナツメ社

Perera,S.B.　1998　山中康裕監修・杉岡津岐子・小松和子・谷口節子訳　『神話に見る女性のイニシエーション』創元社

Qualls-Corbett,N.　1998　The Sacred Prostitute.　菅野信夫・高石恭子訳　『聖娼－永遠なる女性の姿』　日本評論社

山上伊豆母　1998　『日本の母神信仰』　大和書房

Walker, B.G　1983　The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets　Haper & Row『神話・伝承事典』　大修館書店

A Study of women's Spirituality : the Image of Goddesses

FUJISAWA Kasumi

The number of opportunities for discussing the "spirituality" of women is currently increasing in the field of depth psychology. Although "goddess" is considered to be an example of one motif for expressing "spirituality", references to goddesses referred to as the "great goddess" or "mother earth" are particularly conspicuous. The value of these goddesses is being reevaluated as existences having the fundamental spirituality that has been lost during the course of the civilization of mankind. In this paper, while reconfirming the clinical psychological significance of this "mother earth" on the one hand, an attempt has been made to examine the clinical psychological significance of goddesses other than "mother earth". New insights were obtained as a result of discussing this subject while comparing "mother earth" and the "virgin goddess". If "mother earth" is assumed to exist for governing the process of "death and rebirth", then that governed by the "virgin goddess" is the task of "linking to the world of the supernatural", which may be more appropriately referred to as the "supernatural powers of the state of existence". Although numerous research has been conducted on "mother earth", research on the "virgin goddess" has essentially been left untouched and numerous areas remain unstudied. It is hoped that this paper will serve as the first step in the direction of greater research on this subject.